

平成12年度国語部会研究主題（案）

1 研究主題

生きる力が育つ国語科授業の創造

—— 単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる学習指導のあり方 ——

単元学習とは、子どもの興味・関心・必要感に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動を通して行われる学習である。子どもが主体的に活動する場を通じて獲得したことばの力は、学ぶ力や生きる力を適正に育て得るものとなっていく。本研究では、単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てることが、生きる力をはぐくむことになると考え、子ども主体の授業を創出しようとしている。

2 研究主題設定の理由

新指導要領では、相手や目的、場面や状況を意識しながら言語活動をする力を育てることが低学年より繰り返し述べられている。生きて働くことばの力を身に付けるとともに、一人一人の子どもが、思慮深い言語主体として生きていく力を身に付けていくことが強く求められているのである。そして、これからの社会を主体的に生きていくために欠かせない力として、伝え合う力の育成が重視されている。伝えるべき内容や意見を育てることに配慮しながら、自己の考えをことばで表現しことばによってまわりの人たちとかかわっていくことができる子ども、人とかかわりの中で自己実現をしていく子どもを育てることが、肝要となってくる。

本会では、平成9年度より「生きる力をはぐくむ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。「単元学習の理念を生かし、基礎・基本を見据えた指導のあり方」（平成9年度）、「単元学習の理念を生かし、一人一人を見つめる指導のあり方」（平成10年度）「単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる指導のあり方」（平成11年度）を探求してきた。この一連の取り組みは、今、求められている国語教育のあり方と一致するものであろう。そして、この積み重ねの中で、「生きる力」が育つために、単元学習の理念を生かした学習を展開することの重要性が、確認されることとなった。

本年度は、「生きる力が育つ国語科授業の創造」に主題を改め、昨年度までの研究をさらに深めていきたい。生きる力は外からの力で育てられるものではなく、子どもの中で育ってくるものである。指導者は、一人一人の子どもの中に生きる力が「育つ」ことに心を砕き、「育つ」ように学びの場を設け、さまざまに手引きをするのである。そのためには、指導者に、一人一人の子どもを把握し、意図的・計画的に指導・支援することが求められる。以上のことから、子ども主体という原点を見据え、上記のような主題を設定した。

3 研究主題についての考え方

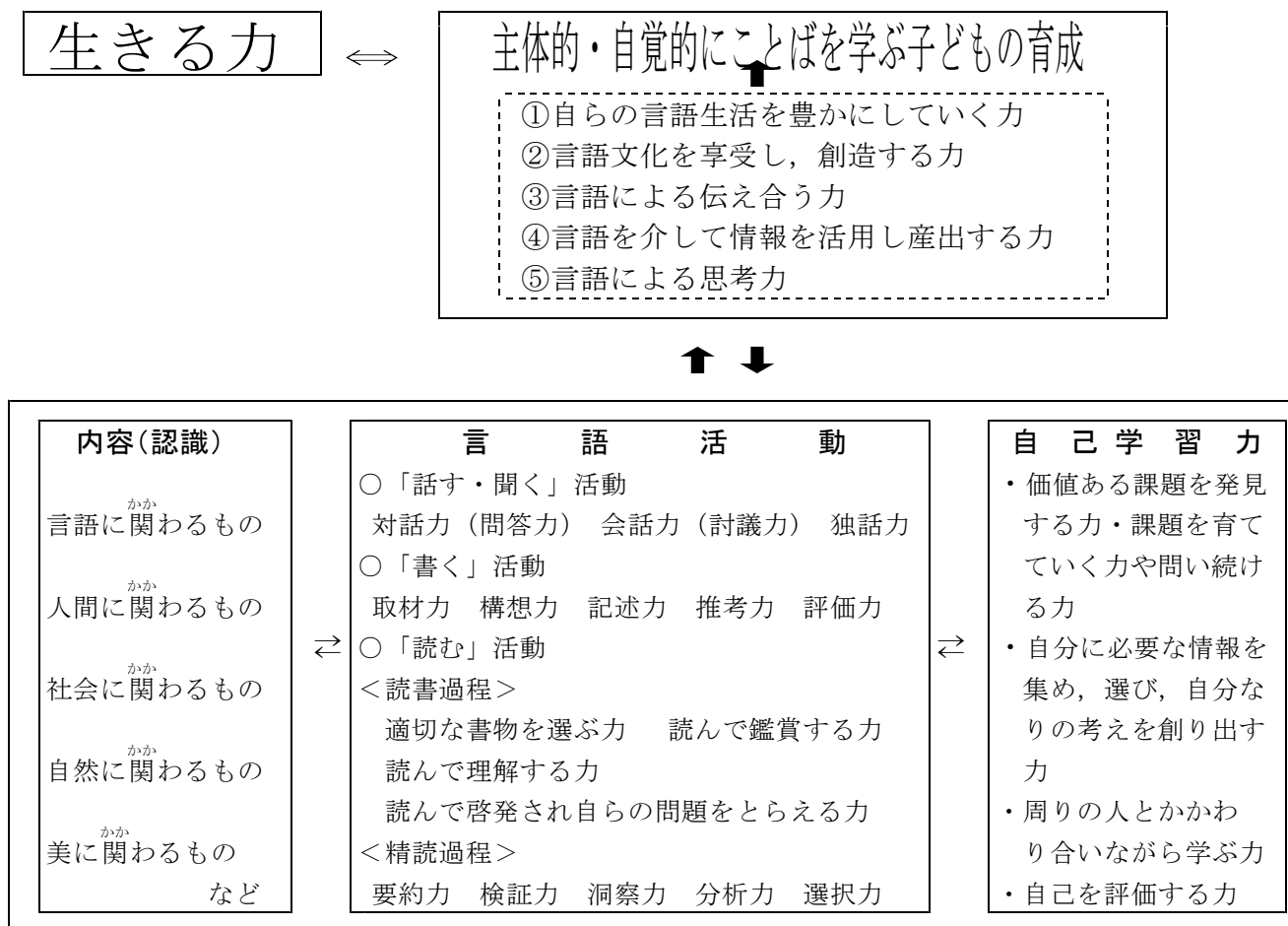
(1) 研究主題について

「生きる力」とは、中央教育審議会答申で示された通り「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動することによって、よりよく問題を解決する資質や能力」と「自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心を持った豊かな人間に備わった力」であり、子どもが主体的・自覚的に学習をすることを通して育つものである。生きる力は国語科においては次のような力に分析される。

- ①自らの言語生活を豊かにしていく力（生活に根ざす言語についての知識や運用の力）
- ②言語文化を享受し、創造する力（言語による文化を味わったり、創り出したりする力）
- ③言語による伝え合う力（人間理解能力を土台とした、他とかかわり合いながら学ぶ力）
- ④言語を介して情報を活用し産出する力（情報を受容するだけでなく、自分の中に生かしていきけるよう再構成する力、情報化社会に生きる情報操作力）

⑤言語による思考力（感じたり，思ったり，考えたりしたことを言語でとらえる力）

これらの能力と具体的な言語活動との関係を図示すると，下の図ようになる。内容（認識），言語活動，自己学習力が相俟つ中で，主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもが育つのである。



このような関係をとらえ，年間計画の中で，どのような力を付けているのか，それぞれの単元のねらいを位置付けて，学習指導を展開することが，生きる力を育てる上で必要となってくる。

(2) 副主題について

こうした子どもの生きる力は，学ぼうとする態度と指導者の支援・指導が同時に働くことによって，一人一人の子どもに身に付いてくるものである。そのために，わたしたちは，単元学習の理念を生かした授業を追求してきた。

単元学習は，一定の学習方法や形態を示すものではない。一つの教材を中心とした学習も，関心・意欲を持たせて，導入から目標に即した展開，発展へと進め，子どもの，未知を求め，人間を探ろうとする，あるいは自分自身を見つめようとする主体的な欲求に支えられた学習の活動として成立するならば，それはまさしく単元学習である。反面，複数の資料を用意し，手広く情報を処理する活動や発表活動を設定しても，その活動が子ども自身の問題を解決したり追求したりする行為になっていなければ，単元学習ということができない。「単元学習の理念を生かす」ためには，そこでの学びが，その子にとって価値ある課題として，学習の対象に据えられていることが欠かせないのである。

また，単元学習は，「主体性」「活動性」「総合性」「創造性」という特性を有する。その子の生活に根ざした価値ある課題を持つことにより「主体性」は生まれる。そして，その課題を解決する過程で展開される「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を通してこそ，生きて働くことばの力を育むことができる。ここに単元学習の「活動性」という特性がある。また，この「話す・聞

く」「書く」「読む」言語活動は、互いに関連し合っている。一つの言語活動のみ取り出して学習するのではなく、それぞれの活動を結び付けながら学習することにより、いっそう確かに、生きて働く力として学習することができる。また、学習する内容も、「総合的な学習の時間」や他教科と連携を図ることにより、豊かに学習することができる。単元学習の「総合性」という特性には、活動の総合性、内容の総合性という二面からのアプローチが必要である。さらに、単元を構想する際、指導者の「創造性」が強く求められる。逆に言えば、指導者の創造性を生かすことが可能になる。このような学習の場でこそ、子どもの創造性もはぐくまれるであろう。

以上のような単元学習の特性を取り入れ、昨年度の小松島大会では、「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動が必然性をもって位置付けられた授業が提案された。その授業研究においては、「子どものことばの生活に根ざす」「一人一人の思いを大切にする」といった文言が、指導者に自然に使われていた。ここに、単元学習の理念が国語学習の礎として定着しつつあることを感じた。また、「主体的・自覚的に言葉を学ぶ子ども育てる」を受け、学び手としての一人一人の子どもの思いや身に付けさせたいことばの力をとらえ、単元が構想されていた。その中で一人一人の子どもが「主体」となって学ぶことができるよう「学習の手引き」の開発が図られ、さらに自らの学びを自覚的にとらえられるよう「学習の記録」が工夫されていた。

この上に立ち、本年度も継続して単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもの育成をめざしたい。年間を見通し、「総合的な学習の時間」や他教科等の連携を図りながら単元を構想し展開することも、その方法の一つとなるだろう。

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより、一人一人の生活に根ざした生きて働くことばの力が育つ「実の場」がいっそう豊かに、必要性を持って生じてくることになる。さらに、それらが年間を見通して計画されることにより、繰り返しそれぞれの「実の場」での言語活動がなされ、指導者の指導・支援がなされることになる。これらの活動を通して、生きて働くことばの力、あるいは基礎・基本となることばの力はより着実に身に付けられるであろう。

また、これまで「主体的」な活動を求めてさまざまな単元が構想されてきたが、その展開の中で自己の生き方にかかわるものとしてことばを学ぶという自覚がなければ、学ぶ力も育たないし、生きて働くことばの力も十分には身に付かない。子どもの興味に追従した活動に終始し、「活動あって、学びなし」ということになってはならないのである。本年度も「生きる力」をはぐくむ上で、「主体的」とともに「自覚的」ということに重点を置きながら、単元を構想し、指導・支援の方法を探ることが肝要であると考え。ただ、「主体的」「自覚的」という文言のもと、どうしても他者と切り離された子どもに目が向けられたきらいがあったように思われた。ここで、他のかかわりの中で自主的・自覚的に学ぶ子どもを育てることの重要性を再確認しておきたい。

以上のことから、「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは、たとえば

- ① 自己のことばの生活の中から、価値ある課題を発見する力、また、そうした課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ② 自己の課題を解決するために、自分に必要な情報を集め、選び、自分なりの考えを創り出し、それをまわりの人に伝える子ども
- ③ 一人で考えるだけでなく、自分の考えを伝え合いながら、よりよい考えを創り出していくために話し合う子ども
- ④ 一連の学習を通して、自己の学びの過程や成果を確認することができ、新たなる学びへの意欲へと変えていく子ども

などが考えられる。一人一人の子どもの中に、「主体的・自覚的にことばを学ぶ」活動が成立するような単元を構想し、実践していくようにしたい。

4 研究の内容と方法

(1) 子ども一人一人の生活に根ざした単元を構想する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには、一人一人の子どもの生活を見つめ、その興味・関心・必要感や国語の力の実態を的確に把握することが欠かせない。子ども一人一人の

生活に根ざした「課題」を設定することに心を砕くとともに、個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設けることや、目的に応じて学習材を作り出し編成していくことに気を配りたい。

- (2) 単元が展開される中で、基礎・基本となることばの力を確実に身に付けることができるようにする。

主体的に活動をしたいといっても、基礎・基本となることばの力がなければ、活動は充実してこない。そのためには計画的に6カ年を見通して、それぞれの単元の中で、どのような国語の力を身に付けさせるかを明確にしておくことが欠かせない。また、「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力は、「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を通してのみ育てることができる。

その子にとっての基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえ、必要性を持たせて学ぶ中で、生きて働く力として身に付けることができるような、単元を構想し、手引きしていくことが大切になってくる。

- (3) 子ども一人一人が主体的・自覚的に学び続けようとする意欲・態度を育てるために、単元展開の過程に応じた、指導者の支援・働きかけのあり方を検討する。

①学習への課題意識を育てるための支援・働きかけ

・日常的な支援・働きかけ

・「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図った支援・働きかけ

②自らの課題へと高めるための支援・働きかけ

③課題を追求する中で、自らの学びを深めるための支援・働きかけ

④自らの学びを振り返り、確認するための支援・働きかけ

⑤学習終了後、学んだことが「総合的な学習の時間」や他教科等、あるいは生活の場などで生かされることへの見通しと、実際に生かされたことへの評価

- (4) 主体的・自覚的に学ぶ力をつけるために、次の二つのことに配慮する。

○他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

話し合いを通して他者と出会う中で、自己をとらえ直すこと、すなわち、自己を相対化し啓発していくことは社会的存在としての自己を育てるうえで大きな意味がある。他とかかわり合うための、対話力・問答力及び討議力が育つよう計画的に指導していかなければならない。

○自己の学びを確認する力を育てる。

学習中での自己の取り組み方や考えたこと・頭をよぎったことなど、その一連の学習を振り返り、記録として残していく作業が必要になる。「学習の記録」をまとめ続けることを通して、自己評価力が育ってくる。

- (5) 「総合的な学習の時間」との連携を図りながら年間計画を立てる。

国語科で培われる力と、「総合的な学習の時間」において育てられる力とは、互いに補い合い、生かし合い、高め合うことができる可能性がある。国語科で学んだことが「総合的な学習の時間」に生かされるよう、あるいは、「総合的な学習の時間」で高まった関心・意欲を受けて、国語科の学習が展開されるよう、年間計画を工夫するのも一つの有効な方法である。それには

(a) 「総合的な学習の時間」に関連付けながら、国語科の指導ができるように単元を構想する、

(b) 「総合的な学習の時間」を展開する中で、国語科の学力を育てる

などの方法がある。その際、次の2点に留意したい。

○学校図書館の効果的な利用を図る。

学校図書館の充実とともに、図書館を効果的に利用する力をつけることができるような機会を年間計画の中に位置付けていきたい。

○『作文読本』の効果的な活用を図る。

12年度から全面改訂される『作文読本』は、学校生活における多様な活動に応じて表現力が育つよう編集されている。『作文読本』は、「総合的な学習の時間」における表現活動を支えるものと言えよう。『作文読本』の効果的な利用を、年間計画の中に位置付けていきたい。